

運動共感に関する研究

柴田 卓 川口 鉄二 関岡 康雄

キーワード：スポーツ技術，運動感覚

A study on sympathy of sports movements

Suguru Shibata Tetsuji Kawaguchi Yasuo Sekioka

Abstract

When a teacher, who is, even if, a well-experienced and talented athlete, teaches new skills to students, it is difficult for him or her to make them learn based only on his or her own subjective learning experiences. In order to acquire new skills there must be established a certain method which is based on common kinesthetic feeling (sympathy) among the teacher and the students. This thesis was intended to clarify specific meaning and concept of "sympathy of sports movements" and to obtain suggestions for methodical improvement in teaching new skills.

Discussions developed throughout this thesis were based mainly upon Kurt Meinel's works and Akitomo Kaneko's works. Topics discussed were (1) preambles (methodology, concept of self-movement, and definition of sympathy) for understanding sympathy of sports movements, and (2) ways to achieve sympathy of sports movements (potential self-movement, and abilities of observation and communication). It was concluded that sympathy of sports movements was dependent upon the correctness and the ability of a teacher who conducts his or her own potential self-movement.

Key Words: sports skill teaching method movement empathy
kinesthesis

1. はじめに

1) 問題の所在

スポーツ指導の実践では、指導者が学習者に対して技術を教え導くことによって、学習者に新たな運動が発生する（できるようになる）こと、すなわち技術指導が中核的な活動としてとりあげられる。その際、この指導力と指導者自身の技能や競技実績との関連は、両者を同等のものとする一般的な了解がある一方で、「名選手かならずしも名コーチならず」といわれ、一流といわれた選

手が現役を引退し、その種目のコーチとなった際に、実りある指導活動が必ずしも保証される訳ではないという捉え方も根強い。

昨今の学校体育指導をはじめとして、スポーツ指導者の指導力不足が問われることは少なくない。しかし、教員やスポーツ指導者養成課程におけるカリキュラムでは広義の意味での指導力の養成を目標に置かざるを得ないことから、前述の運動の発生に関わる指導力養成に焦点が当たりづらいというのが現状であると言える。長年、

チャンピオンスポーツに選手として君臨するということは、当然、その体験から高度なレベルの技術を自己の身体知として持ち合わせていることでもあり、そのような実績を持った指導者は、高度な実践的知識を現場にフィードバックすることが期待され、学習者の関心もこの高度な技術の習得に向けられる。もちろん、習得に必要なレジスタンスやメンタルなどのトレーニング方法やそのプログラミングやマネジメントなどの理論であれば比較的容易に学習者に伝えることができるので、一定の成果を期待することは可能であろう。しかし、指導者が過去に経験してきた技術習得過程というのは極めて主観的な色彩の強いものであり、その個人的な感じ方をベースにした体験は、教えようとする学習者のものとは基本的に異なるものである。したがって、指導者が経験してきた個人的な感じ方や技術をそのまま伝えるという強引な押しつけは通用しない。つまり、自らが体験した感じを懇切丁寧に説明したとしても学習者には直接的に伝わらないのであるから、新たな運動の発生には指導者と学習者に共通する感覚をベースにした指導法を前景に立てざるを得ないのである。

技術指導におけるこの運動共感の重要性は、マイネルをはじめとして、日本でも運動学の立場から多くの研究を見ることができる。しかし、その内容は、フッサーやメルロ＝ポンティをはじめとする現象学や人間学をその土台に学問的な基礎付けが行なわれることが多く、難解な用語も相俟って、一般的なスポーツ関係者にとっては身近な事例研究への要望が多いというのが現状である。1960年にスポーツ運動の発生と構造を実践的な立場からまとめたマイネルの「スポーツ運動学」(金子訳, 1981)は、「わざの伝承」(金子, 2002)において、運動伝承研究という新たな研究地平が加えられ、さらなる発展を遂げている。この運動伝承研究は、他の運動研究との違いを浮き彫りにするという意図から、キネステーズをはじめとする多くの述語や専門語が用いられており、クローンやITをはじめとする自然科学的思考法に慣れ親しんだこれまでの科学的パラダイムを引きずったままでは、その語彙や概念の理解に苦しむことは必須である。

本研究は、この指導場面に潜む問題を解決する鍵概念として、指導者が学習者の運動を共感するという意味の「運動共感」の具体的内容について考察を加え、指導力向上のための方法論的示唆を得ようとすることを目的とする。

2) 運動共感の重要性

運動共感の具体的内容を考察するに先立って、まず指導現場における運動共感の重要性を明らかにしておく。

指導現場において技術を指導する場合、学習者が目標とする運動をどのように覚え、どのような情報を必要と

しているのかといった内容が中心的に取り扱われることがほとんどであろう。その際、動きを内部から観察することが重要であり、外から見た形だけを動きの課題として要求するだけでなく、学習者の感覚的な動きに直接伝わるような情報をいかに提供するかが問われるのである。このような場合、指導者が模範を示したり、言葉によって動き方を説明するといった方法が一般的である。指導者は過去にその運動を経験し、ある程度の技能や競技経験によって模範を示すことができると共に、課題習得に関する運動類縁性や指導言語をはじめとする情報つまり運動知識が求められる。長年チャンピオンスポーツの世界でプレーした指導者は、模範を示せるだけの技能を持ち合わせていることが多く、その運動が何の苦もなく意識せずに行ってしまうためにできない学習者の運動感覚がわからないといったことがある。例えば、「ブルークボーゲンの仕方を説明したのに何でスキー板のトップがクロスしてしまうのか、転んだ時の起き上がり方をあれほど説明したにもかかわらず、何で起き上がることができないのか」といったことがわからない場合があるのである。そのような意味から、スポーツ運動を指導する際には、指導者は自分にとってのコツやポイントだけを伝えようとするといろいろと問題が生じることになるため、どうしても学習者の側に立って動きのこつを再確認し、共通する感覚世界を構築する必要が出てくるのである。

指導現場において、指導者によるこの運動共感が欠落すると、「私はこうしているからこうしてごらん」などの自分特有のやり方を指導することになるが、それは指導者にとってのコツであって、学習者にとってのコツではないのである。それにもかかわらず、個人的なコツとしてのやり方や自分が経験してきた練習方法を強制的にやらせるのは、型にはめ込むという学習者の感覚世界を無視した「指導の鋳型化」である。それは、学習者が今これからやろうとする・やりつつあるキネステーズ世界にまったく無関係な外からの一方通行的な指導となるのである。これでは一向にできるようにはならないし、できるようになったとしても指導(動きを伝承する営み)ではなく、単なる学習者の自得である。ここで重要なことは、学習者が何をイメージし、何を理解し、それにともなっていく運動に対して実際は、どうであったのかといった学習者のキネステーズ世界における情報を指導者が知る・共有するという意味での運動共感である。この運動共感の営みを放棄しながら指導を続けたとしても、それは学習者が必要としないはずな言葉掛けに過ぎず、学習者が耳を傾けない空虚な指示語となるのは、当然の成り行きであろう。このことから運動共感が欠落すると、指導の一方通行化を引き起こす可能性があることを強調しておかなければならないのである。

3) スポーツ技術と技術指導

本研究は、技術指導において運動共感を主題としていることから、スポーツ技術（運動技術）および技術指導がどのような意味で用いられているかを明らかにしておく必要がある。

スポーツ技術に関する定義は、「ある一定のスポーツの課題をもっともよく解決していくために、実践のなかで発生し、検証された合理的かつ経済的な仕方である」（マイネル、1981）や国際スポーツ専門語会議（1965）「一定の運動課題を解決するために発達してきた合理的な“運動形態（Bewegungsform）”」（金子、1985）という理解が一般的であろう。いいかえれば、「その技術を使えば、使わないときと比べて、はっきりと成果に差がでるような運動の仕方」（金子、1996）ということができる。つまり、スポーツ技術とは、ある運動課題を達成するための効果的な仕方（動き方）ないし運動形態ということになる。

技術指導とは、前述した技術を教え導くことであり、それによって、学習者がある運動をできるようになることを目指す行為である。ここでいう学習者ができるとは、目標とする運動を発生させることができるという意味である。しかし、学習者に目標とする運動が発生したとしても、その後、何らかの狂いが生じ、できなくなることもある。それ故、技術指導とは、初心者に目標とする運動を発生させる行為としての一義的な解釈ではなく、発生した運動が、分解・分裂した場合の修正指導も含まれる。したがって、本研究における技術指導とは、運動課題に対してパトス世界で志向する学習者にとってのもっとも合理的かつ経済的な仕方ないし運動形態を教え導くことであり、それは学習者が関わるすべての学習位相にかかわるものであると定義しておくこととする。その内容は、まず運動観察によって学習者が行った運動から形態的特徴とともにそのキネステーズをも見抜かなければならないのである。単なる図形の比較であれば、誰にでも見て判断することができる。しかし、その動きの感じ・感覚を見抜くためには、少なからずその運動を体験したり、それに近い運動経験の蓄積によってあたかも自分が実施しているかのようにその運動を潜勢的にやってみることができるという能力を実践的知識として持ち合わせ、なおかつ動員できなければならないのである。その意味では、技術指導こそスポーツ指導者の専門能力がためされる腕の見せどころといえよう。それが専門書で知った自然科学的な情報を説明するだけであれば、画家でも、音楽家でもできることになるし、そのことと技術指導を本質的に区別する必要があることをここでは確認しておきたい。

2. 運動共感の前提条件

1) 異なる研究方法

研究対象としてスポーツ運動をとらえた場合、その研究がどの領域に属するかによって当然その内容も異なることになる。運動共感を理解するための前提条件として、本研究がスポーツ運動をどのようにとらえているのかを他の研究方法との比較を通して明らかにしておく必要がある。朝岡は「人間科学と運動研究」（1991）の中で、シュトラッサーを引用しながら自然科学と人間科学の違いを区別している。自然科学の方法は数学的手段を用いることによって対象から価値を捨象して普遍的法則を探求するのに対して、人間科学の方法は価値に関係づけて対象の個性を記述することを目指すのである。自然科学の方法を用いた研究では、研究対象は研究者の向こう側に物として措定され、その出来事は数学的に客観的に記述され、この方法によって、とらえられないものは「客観的でない」として研究対象から切り捨てられてしまう。このような研究者とその対象の関係は、原子物理学者の原子に対する関係や生物学者の細胞に対する関係にみられ、「主観—客観関係」と定義している。一方、人間科学の方法を用いた研究は、研究対象に対して、「人格のあらゆる共感面での完全な人格的介入」が要求されるのであり、児童心理学者の児童に対する関係や精神科医とその患者に対する関係にみられ、「主観—主観関係」と定義している。当然、本研究は後者の立場をとるものである。なぜなら、マイネルの「モルフォロギ的考察法」（金子訳、1981）において、運動観察とりわけ他者観察はゲーテのいう対象的思惟を土台としている。この対象的思惟とは、「対象に即して思考する」（金子、1994）ものであり、対象に即すとは対象の側から、対象になったつもりで、その運動を観察することを意味し、あの運動はどこがどうなっているのか、どんな感じでそうなるのかといった学習者における運動感覚の意味構造を理解することが不可欠となっている。その行為は「人格のあらゆる共感面での完全な人格的介入」と同じ地平にあるのである。

2) 自己運動の説明

スポーツ指導の実践、とりわけ技術指導において、指導者は、学習者の運動を観察することによって、形態的な欠点を見抜くと共に、その学習者によるスポーツ運動の中に、どのような意味や価値が隠されているのかをも見抜かなければならないのである。言い換えれば、学習者によるスポーツ運動には、意味や価値といった主体性が意識的かつ無意識的に潜んでいるということになる。われわれのスポーツ運動研究（スポーツ運動学・運動伝承研究）では、他の運動研究との不要な混乱を避けることを目的とし、この主体性の含まれるスポーツ運動をポイテンディクやヴァイツゼッカーの意味の「自己運動」

(金子, 1994)として認識しているのである。そもそもスポーツ運動は、動こう、動きたい、動くべきだなどの決断によって行なわれるものである。意の向くままに動くのをやめてしまえば、運動の発生は起こらないのである。また、好きではないしできることならやりたくないが体育の授業だから仕方なくやる・やっているということもあるかもしれない。そこでいい加減に運動を行なえば、いい加減な運動が発生し、教師に見抜かれ怒鳴られるかもしれない。このように、スポーツ運動は生命ある人間が抱く自らの志向による行為であり、自己運動として理解されなければならないのである。

3) 共感の概念に関する理解

共感の歴史は古く、広い意味での概念は、17世紀頃から哲学、倫理学、美学などで取り上げられ、ホッブス、ヒューム、アダム・スミスらによって「同情」「あわれみ」「感情移入」といった語が共感に近い概念として使われていたといわれている。その後、人格心理学、発達心理学などによって、様々に解釈が行なわれ、その定義は、未だ統一した見解が得られず、混乱を招いているという(澤田, 1992)。「広辞苑 第4版」(新村, 1991)では、「他人の体験する感情や心的状態、或いは人の主張などを、自分も全く同じように感じたり理解したりすること。同感。」とある。特徴は、その対象が相手の感情と考え方にあるということである。この意味で使われるいわゆる一般的な共感とは、快感情や不快感を共有する、一体化するという意味で使われている。たとえば、映画を見ていて主人公が幸福であれば、自分も幸せになったかのように感情移入を通して快感情を共感することができる。逆に不幸のどん底であれば、同情を通して不快感を共感することになる。いずれにしても、ここでの共感のほとんどが、ストーリーの展開や成果や結果に対して生じる共感である。それに対して、本研究における運動共感とは学習者による自己運動をその対象とし、成果や結果から生じる悲しみや喜びなどの広い意味での共感ではなく、学習者の行なう運動経過と同時に生じる運動感覚的な共感であり、「身体的な共振のレベルの共同性が問題であること」(本間, 1998)をここでは確認しておきたい。

3. 運動共感の理解

1) 先行文献における運動共感

運動共感を本質的に理解するために、はじめにマイネルの「スポーツ運動学」(金子訳, 1981)による説明から紐解いていくこととする。「すぐれたコーチ(あるいはベテランの選手)は観察した運動経過、とくにそのリズム経過をやむにやまれず同時体験しているし、その経過を運動感覚によって“中から”知覚しているのである。こうして教師は力動・時間的分節あるいは空間・時間的分

節においても、その起こりうる欠点に対して生徒の注意を喚起することができる。このような運動共感¹⁾は実際の指導活動において、また運動系の学習過程において、教師にとっても生徒にとっても運動系の認識獲得のきわめて重要な源泉であることは明らかである。また、「意識して観察するときの運動共感²⁾は、運動に強く志向する構えと、経過をとらえようとする意図があるときに、初めて認識の源泉となる。」とある。

さらに、訳者である金子は訳者注のなかで、「他人の運動を見ていてそれに共感することである。いわば、他者観察の結果の自己観察化である。すなわち、自分の運動を運動分析器によって対象化することはできるが、他人の行なう運動を見ていて、その運動映像のなかに自分を投入させ、自己観察としてその運動覚を自分のものとして感じ取ることが運動共感である。運動共感³⁾はしばしばその人の動作として表出されることがある。この運動共感の能力は他人の運動を指導するときには不可欠の前提となるものであり、これなしには単なる空虚な指示語による指導になってしまう。」としている。

この二つの説明においてに共通している点は、それまでに獲得された運動経験を基に、他者の運動をあたかも自分でやっているかのようにとらえることである。マイネルは、それを「同時体験」とし、金子は「他人の行なう運動を見ていて、その運動映像のなかに自分を投入させること」としている。しかし、これらの説明では、その具体的方法や内容を本質的に理解するのは難しい。なぜなら、これらの説明では、課題となる運動の経験さえあれば、運動を共感することが可能であるという解釈もできることになるからである。

2) 潜勢自己運動の検討

マイネルの「スポーツ運動学」が日本で翻訳されて6年後の1987年に、金子は「運動観察のモルフォロジー」を発表した。そこでは、「ほんとうに実践的意義をもつ運動共感⁴⁾は、運動像を対象(Gegenstand)として、向こう側に見て共感するのではない。運動想像力によって、自らその運動を実施するところに、初めて全体的な意味での運動共感が成立する。つまり、観察対象になっている運動経過を改めて観察者自身の自己運動として、潜勢的(virtuell)にやってみて、それを観察するの⁵⁾でなければならない。いわば、観察者による潜勢自己運動(virtuelle Selbstbewegung)として、観察する運動をイメージの中で遂行しながら、それを自己観察するのである。そのイメージの世界では、自分が現実⁶⁾にその運動をやっているときと同じ視野が展開されるし、運動それ自体が、どこでどんな力を入れ、どのような空時分節で行なわれるかも、主体的意図をもった自己運動として、鋭く観察されるのでなければならない。この潜勢自己運

運動のイメージの世界を構成するには、現実の自分の運動体験と運動経験がすべて動員されることはいうまでもない」という。ここで、はじめて運動共感の方法として潜勢自己運動という概念がとりあげられたのである。サルトルの準観察を土台にした潜勢自己運動という概念が運動を共感するためには、不可欠であるという説明に一つの共通理解を呈示したのである。しかし、金子の言う「観察する運動」には、二つの解釈をすることができるのである。一つは、課題となる運動の理想像として、できる側から観察する運動である。もう一つは、学習者が実際に行なっている不安定な運動として、できない側から観察する運動である。できる側からの潜勢自己運動とは、指導者がすでに身体知として習得している感覚世界の中で、課題となる運動を自分自身が行なう際にどのようにやるのかといった方法ないしコツを探るといものである。できない側からの潜勢自己運動とは、学習者の感覚世界の中で何が問題となり、それはどのようにすれば解決できるのかといった学習者にとっての課題解決法ないしコツを探るといものである。その違いを明確にしたのが、金子一秀の「キネメロディーの伝承論的基礎」(1997)である。「自らのキネステーズ体験をすべて動員し、学習者の動きかたを潜勢的に自己運動しても、その自己観察はあくまでも自分のキネステーズとしての自己観察となる。というのは、学習者のキネステーズを取り込んでいないからである。学習者のキネステーズを取り込まずその動きかたが潜勢自己運動の中で成功しても、それはくわたしのこつ>にしかすぎない。(略)学習者の知覚の構造化に関わるにはくきみのこつ>を知り、それを教えなければならない。」である。つまり、指導者による潜勢自己運動が、学習者のキネステーズを探る潜勢自己運動なのか、それとも指導者自身のキネステーズを探る潜勢自己運動であるのかといった決定的な違いを明らかにしたのである。

3) 運動共感の能力

これまで、運動共感には潜勢自己運動という共感法が不可欠であるということを見てきたのだが、ここで注意しなければならないのは、潜勢自己運動はあくまで、イメージでしかないということである。「あの先生にかかれば、どんな生徒でもあつという間にできるようになってしまう。」というような経験豊富な優れた指導者であれば、潜勢自己運動によって、「どこでどんな力を入れ、どのような空時分節で行なわれるかも、主体的意図をもった自己運動として、鋭く観察」(金子, 1987)することができよう。ところが、指導者の指導経験が浅かったり、学習者が極端に初心者であるような場合、潜勢自己運動それ自体がそう簡単なことではなくなるのだ。いくら潜勢自己運動を通して学習者の感覚世界を探ろうと試みて

も、まったく臨場感が沸かなかつたり、確信が持てないなど失敗することも少なくない。このような場合には、学習者の運動実施後にその内省を質問を通して直接聞き出し、自分が潜勢自己運動と称して持ち得た情報の内容と直接聞き出した内容を「すり合わせる」ことも重要である。時には運動それ自体が言葉に表して説明することが難しいため、自らの感覚世界の説明に苦渋する学習者をなんらかの言葉や動作によって誘導することも必要となろう。つまり、コミュニケーションによる情報のすり合わせによって、潜性自己運動を促したり、補うことも重要となるのである。このコミュニケーション能力は、金子の言う「交信能力」(2002)と軸を一にするものである。つまり、相互に共通する感覚世界を構築するためには、①観察能力に支えられた潜勢自己運動を行い、そこで確信が得られなければ、②交信能力によって「情報のすり合わせ」を行わなければならないのである。したがって、運動共感には二つの構造があることが明らかとなり、そこでは観察能力と交信能力の二つの能力が必要となることが明らかとなったのである。

5. まとめと展望

スポーツ技術の指導実践において、「名選手かならずしも名コーチならず」という命題からスポーツ指導者の指導力不足が問われ、指導者養成のあり方までもが問われている^(16-522頁以降)。しかし、一向にその解決への糸口が見えない現状から本研究ではその問題の所在を運動共感に求めたのである。

この運動共感の具体的内容を考察するにあたり、まず、指導実践の立場からスポーツ技術の概念の検討とその指導の際に専門的能力が必要とされることを明らかにした。そしてこのような技術指導において、観察対象とされる学習者の運動は、物体としての運動ではなく自己運動としてとらえることが運動共感の前提となることを指摘した。これらを踏まえ、運動共感の本質的理解のためには潜勢自己運動という共感の仕方が不可欠であり、それは指導者自身に向けられるのではなく、学習者の感覚世界へ向けられなければならないことが確認され、その際に持ち得た情報を直接学習者とすり合わせることも重要であることが確認された。さらに、共感能力として観察能力、交信能力という二つの能力が不可欠となることを指摘した。従って、日常的な概念としての共感理解に基づく指導では、この潜勢自己運動という共感法とそのため能力が欠落しやすいことから、一方通行的な指導が引き起こされる可能性のあることが明らかとなったのである。つまり、指導現場でよく聞く、「(指導者が)何を言っているのかわからない」「(指導された通り)やろうとしてもできない」といった学習者の言葉は、指導者の導きと、学習者の取り組みとにおいて生じる格差をあらわ

している。この格差をつくり出す原因の一つは、学習者のキネステーゼ世界を探ることが技術指導には不可欠であるという認識と、そのための能力を組織的に育成するための方法論の欠落にある。この格差をつくらないためには、学習者がいまどこで躓き、それはどんな感覚であるのかといった学習者の感覚的な意味構造を潜勢自己運動によって知るといふ、運動共感の構造認識が不可欠となるのである。

本研究では運動共感が指導者の行う潜勢自己運動の正否とそのため能力にかかっていることを考察してきたのだが、今後は事例を通してその能力を具体的に明らかにし、そのためのトレーニングシステムを確立することでスポーツ指導者に必要となる共感能力の意図的な養成が実現することを願うものである。

文献

- 1) 朝岡正雄 (1991) 人間科学の方法と運動研究. スポーツ運動学研究 4. 日本スポーツ運動学会.
- 2) 澤田瑞也著 (1992) 共感の心理学. 世界思想社.
- 3) ボイテンディク (1970) 人間と動物. みすず書房.
- 4) エドムンド・フッサール/立松弘孝訳 (1965) 現象学の理念. みすず書房.
- 5) M. メルロー=ポンティ/竹内芳郎・小木貞孝訳 (1967) 知覚の現象学 1. みすず書房.
- 6) M. メルロー=ポンティ/竹内芳郎・小木貞孝訳 (1967) 知覚の現象学 2. みすず書房.
- 7) M. グロッサー/A. ノイマイアー 朝岡正雄他訳 (1995) 選手とコーチのためのスポーツ技術のトレーニング. 大修館書店.
- 8) 本間二三男 (1998) 人間科学の立場から見た動きの共感の構造. スポーツ運動学研究 11. 日本スポーツ運動学会.
- 9) 金子明友 (1968) 運動技術論. 序説運動学. 大修館書店.
- 10) 金子明友 (1985) 運動技術の今日の問題性. 体育科教育 10 月増刊号.
- 11) 金子明友 (1987) 運動観察のモルフォロジー. 筑波大学体育科学系紀要第 10 巻.
- 12) 金子明友編 (1990) 運動学講義. 大修館書店.
- 13) 金子明友 (1994) ボイテンディクの動きの思想. 体育の科学 Vol.44.
- 14) 金子明友監修 (1996) 教師のための運動学. 大修館書店.
- 15) 金子明友 (2002) わざの伝承. 明和出版.
- 16) 金子一秀 (1997) キネメロディーの伝承論的基礎. スポーツモルフォロジー研究 3. 日本スポーツモルフォロジー学会.
- 17) 金子一秀 (1999) 現勢運動と潜勢運動の構成分析論. スポーツモルフォロジー研究 5. 日本スポーツモルフォロジー学会.
- 18) 佐野淳 (1994) スポーツにおける「技術」の形態学的視座. 筑波大学体育科学系紀要第 17 巻.
- 19) ヴァイツゼッカー/木村敏・浜中淑彦訳 (1975) ゲシュタルトクライス. みすず書房.
- 20) ヴァイツゼッカー/木村敏 (1995) 生命と主体. 人文書院.
- 21) K・マイネル/金子明友訳 (1981) スポーツ運動学. 大修館書店.